

イチゴの品種特性と栽培管理

北海道農試 花岡 保

イチゴの最近の人気は非常に大きく、春から初夏の北国の店頭に美しい色どりをそえている。これを食味すればそのスイートな香味は訝えていて、老人、婦人、子供にも喜ばれ、ビタミンCなど栄養分も豊富で保健そさいとしても貴重な存在である。以下優良な品種の特性や栽培管理などについて述べてみたい。

I イチゴの品種の特性

イチゴはアメリカなどでは大陸の東西、あるいは南北などの特有の気候や土壌など生育条件の相違により作型や適品種が多様に分化しているようである。わが国の冷涼地帯に適する品種もアメリカの北部やカナダ、北欧の品種が適するが、南部の品種でも不思議なことに寒冷地に適することが多い。逆に寒冷地の品種は暖地ではほとんど適応していない。わが国ではイチゴの品種はダナー三〇%、幸玉三〇%、その他四〇%といわれている。ダナーは筆者の見聞では盛岡以南が適し、北海道ではあまりよい成績がみられない。むしろ幸玉が適合しているようで、最近ではフェアファックスやドルセットに代わって作付けされている。これは恐らくダナーが乾燥に弱く、五、六月に乾燥する本道の気候に不適なこともよく考えられる。しかし食味の点では他の追従を許さぬ程に優良で、五月の札幌市場では栃木や福島産の移入ものが幅を利かせ

ている。幸玉は強健、多収でランナーも旺盛に発育し作り易い。味も甘くて日本人好みするが、酸味に不足し、果実は軟らかで粒もやや小さい。筆者が園芸試験場盛岡支場で試作した結果ではなお数種の優良な品種が見出され、本道でも比較中なのでその品種を紹介する。

1 アーリードーン

草勢の強い極早生種で耐霜性がある。果実は濃紅、円錐形、大粒、豊産性の品種である。ビニール被覆の促成に適し幸玉より三、四日早く着色し、収穫初期から揃ったものを多量に出荷できる。酸味はやや強く砂糖をかけて食べるべき品種である。肉質は緻密で固く、日持、輸送性は非常によい。果実の内部まで紅く冷凍用、加工にも適する。

2 レッドグロー

前者よりやや晚いが早生に属し、果実は大きく色は鮮紅で光沢があり、味は甘酸適和し日本人好みする最高の味覚である。果肉も緻密で日持がよいが、収穫期の切上りがやや早く、収量がやや低い。冷凍などの加工には最適である。

3 ポカホンタス

中生の早生に属し草勢強く作り易い。果実は鮮紅の円錐形で見栄えし収量は多い。フェアファックスの地帯に変わるべき品種と思われ、果肉緻密で輸送にも強い。酸味は

さわやかで甘酸適和し、生食のみならず加工にも適する。

4 フロンテナック

晩生の極大粒の品種である。果実は濃紅、円錐形で最も収量が多い。収穫期の後半も粒形の小型化は少ない。露地栽培地帯では出荷期後半に本品種を出荷することにより価格の安定をはかり得るし、大粒なので収穫能率も上るものである。

5 シュアクロップ

アーリードーンの中生のものという感である。多収で根腐病にも強いので根腐病の発生地帯にシレッツ、スチールマスターなどと共に用いるがよい。

以上の品種はいずれもウィルス病や芽線虫に無病のものを輸入してまだ日が浅いので、わが国の既存の品種にみられるウィルス病の被害も今の所みられていない。品種の特性を考えて経営に適宜とり入れて戴き度いものである。

II イチゴの栽培管理

1 育苗

イチゴの育苗は八月上旬苗とりして約四十日育苗し九月上、中旬頃定植するのがよい。育苗を簡単に済ませるのには大きなランナーを用いて簡易育苗をするのがよい。このためには前の年に二〇〇×五〇の間に隔で親株を植え、肥料は窒素質肥料をやや多目に施し、花は全部つみ取る。六月中旬頃にこの畦間に三・三平方呎当たり堆肥の腐熟したもの一〇キ、硫安一〇キ、過石二〇キ、加里五〇キを散布し耕耘機で深く入念に混和する。地表は凹凸がないよ

イチゴの品種特性

	熟期	果色	果形	酸味	ジャム用 冷凍	12株 (3.3m ²) 当り収量			
						1年株		2年株	
						重量 (Kg)	1果重 (g)	重量 (Kg)	1果重 (g)
アーリードーン	早	濃紅	円錐	やや多	良	2.071	10.6	5.437	11.6
レッドグロー	早の晩	鮮紅	ク	中	極良	2.373	10.8	4.548	10.7
シュアクロップ	中	濃紅	ク	やや多	良	2.310	12.0	5.513	9.8
ポカホンタス	中	鮮紅	ク	やや多	極良	2.629	9.6	4.758	9.9
フロンテナック	晩	濃紅	ク	やや多	中	2.791	13.4	6.905	12.9
幸玉	中	紅	ク	少	不良	1.433	9.2	5.416	7.8
ダナー	早の晩	濃紅	ク	中	やや不良	2.218	12.2	3.211	8.4



うにレーキで平にならし、除草剤シマジンを一〇ㇵ当たり四〇〇ㇵ内外を水にうすめて噴霧器で散布する。ランナーの根が出て着地後は葉害はなく雑草の繁茂も少ない。七、八月中はランナーは盛んに発生、伸長するが、時々畦の間を見廻って子苗が一〇〜一五ㇵの間隔に着地して生育するようにランナーを配置したり、除草をして子苗の発育につとめる。定植前のズラシはいらない。

2 定植

植え付けの適期は早い程よいようで八月中までよいがおそくとも九月中旬には植え終るようになりたい。この適期から遅れると活着や秋の生育が悪くなり引いては越冬が困難になり勝である。イチゴの花芽のできるのも秋の九月頃である。本圃の定植準備も以上の時期に合せてするが、一〇ㇵ当り堆肥一、五〇〇ㇵ、窒素、磷酸各々七〜一〇ㇵ、加里五〜七ㇵ(各成分量)を定植前に施す。イチゴは生食するので清浄栽培に心掛け絶対に下肥は使用しないようにする。肥料の施し方は畦幅一畝に作条し、肥料を畦に条施した後よく土と混和し覆土後の畦はやや高い方が株の場所に水がたまらず越冬条件もよい。植孔は株間三〇ㇵにして作るのがよい。

ランナーを直接苗に用いる簡易育苗法は前にも述べたが、苗が花芽の数をやや不足して内蔵するので、植孔当たりのランナー数を増やして、ランナー二、三個体を一緒に植えるのが翌年、翌々年の収量を増加させて効果が大きい。これは株間を三〇ㇵより密植すると考えてもよいが二、三株植の

方が定植時やその後の管理が楽なようである。まず移植前にランナーの蔓を切り、移植ゴテで大苗から選んで、二、三株一緒に一つの植孔に植込む。苗は地平面から浮び上っても低く沈んでも活着や生育が悪くなるので注意を要する。覆土した後苗にたっぷり灌水すれば活着は容易である。以上の方法は育苗に手数のかかる割に多収を得るのが長所であるが苗数は相当多く準備しなければならぬ。なお苗は健全な草勢の強いランナーを使用し、苗のなかにウィルス病の株や芽線虫におかされている株は取除くようにして戴き度い。とくに他所より苗を購入の時は十二分に注意してほしい。

3 栽培

本圃の追肥は苗を定植した後活着の頃を見はからって、前述の元肥の四分の一量の肥料を側溝を作って施した後覆土する。畦幅を一畝以上に広くすると追肥は肥料を畦間に散布して耕耘機で耕耘するのもよい。越冬後には春の起生期に秋肥と略同量の肥料を追肥し、春の生育を旺盛にさせ五月の開花期を迎える。結実して果実が大きくなり始めた六月初旬に中耕除草後株間に麦稈や稲わらを敷き込む。収穫期が終ると踏み固まった畦間に肥料を散布後耕耘機で中耕混和させる。夏草の除草は中耕直後シマジン(CAT)二〇〇ㇵ(一〇ㇵ当)を噴霧機で土壌処理して行なう。夏にはランナーが非常に旺盛な発育をするので時々除草をかねてホーで刈取り整理する。また下葉の病斑の出たものは刈取るがよい。二年株以上の古株は株が大きくなり上に飛び出すが、

夏から秋の時期の間に除けつし、培土してやると生育がよくなる。

イチゴの病害虫は比較的少ないが、重要なものに灰色かび病がある。これは高温、多湿のとき果面にでやすく、トリアジン五〇〇〜六〇〇倍液、またはオソサイドを幼果の時から噴霧して防除できる。うどん粉病はカラセン一、五〇〇〜二、五〇〇倍液の散布がよい。イチゴのウィルス病は我国では従来無関心な病害であったが、最近わが国の経済品種はほとんど罹病していることがわかり、被害の甚しい例も少なくない。これには馬鈴薯の種子薯同様に無病地で隔離した苗や、輸入後日の浅い無病品種の入手が望ましい。害虫のなかでは芽線虫の被害が甚しく、道内の有名産地でもイチゴの栽培のできなくなった所があるくらいである。被害株の葉は奇形となり葉はつやが出て緑色が濃くなり、症状がひどくなると芽の部分のランナーや苗の芽の部分が赤味を帯びてくる。果実の結果が悪く、腋芽の発生が多くなることが見られる。ランナーにより伝播するので被害の親株から絶対にランナーをとらないようにし、被害株は焼き棄てる。ランナーや芽に七月中旬になったら七〜一〇日おきに三回、ホリドールかE P Nの一、〇〇〇倍液を噴霧して防除してもよい。夜盗虫にはデルドリン乳剤、赤ダニはテップ二、〇〇〇倍液またはアカール、ナメクジはナメトール、ナメックなどで防除する。

4 収穫と出荷

イチゴの栽培管理のなかで収穫労力が最

も人手を必要とするので、農家個々の作付面積は収穫労力に応じて決められるのが普通である。日中より早朝に収穫のものは果実温度が低くは日持がよいといわれている。収穫には一果ずつ片手で摘みとり、片手が一杯になったら手かごに入れる。

市場への輸送距離の長い産地ではやや赤色がついたものを収穫して出す方が日持がよく輸送中に着色する。筆者が前述した新品种はいずれも果肉が緊密で輸送性、日持の点では優秀である。従来本道では店頭で秤売がみられるが、最近ポリボックスのパラ詰はダンボール箱に収めた荷姿のものも現われ結構なことである。今後とも出荷技術については一段の進歩を期待したい。

5 ビニールのトンネル栽培

イチゴをトンネル栽培する時は八月上旬に苗とりして育苗するのがよい。定植は畦幅一三〇ㇵの二条植にし、条間約四〇ㇵ、株間二五ㇵぐらいに密植する。九月中旬に定植後、活着すればすぐビニールのトンネルを二条ごとかけ高温時の換気と寒冷時の防寒に心掛け、十月末には苗を外気に慣らしながらビニールを徐々に取除く。この結果、花芽が充分にでき上った苗を越冬させ、雪解けするとすぐまたビニールで被覆する。同時に地面にビニールマルチをし地温を上昇させて開花を促す。寒い時はビニールの上からコモかけし、市場で価格の高い五月中旬頃から収穫、出荷できる。品種は早生で揃うアーリードーンがよい。

(北海道農業試験場作物部)